

## 「上を向いて歩こう」と永六輔さんの信州疎開

関口 貞雄（48期：関西同窓会）



平成 28 年（2016 年）7 月 7 日に“大往生”された永六輔さん（本名：永孝雄、50 期）は、マルチ・タレントとして昭和、平成の文化を盛り上げた功労者である。様々な分野で活躍したが、作詞家としても才能を発揮し、その代表作が「上を向いて歩こう」で、日本中で知らぬ人は殆どなく、広く愛唱され、世界的にもヒットした歌である。

昭和 36 年（1961 年）、産経ホールで行われた「第 3 回中村八大リサイタル」で歌手坂本九によって発表され、続いて NHK の人気番組の「今月のうた」として取り上げられて好評を博した。その直後に発売されたレコードが大ヒットし、坂本九が「NHK 紅白歌合戦」に初めて選出されて歌い、人気歌手となった。翌年には海外でも「SUKIYAKI」のタイトルでレコードが発売されて好評で、「全米ビルボード誌第 1 位」となった。その後も日本の歌でこの榮譽に輝いた歌は出ていない。この様な名歌の誕生秘話をご紹介しますと思う。



永六輔さんと中村八大さん



坂本九さん

永さんが亡くなった後、平成 28 年（2016 年）11 月 29 日の毎日新聞夕刊にフォーク歌手高石ともや氏が「私の永六輔、私のボブ・ディラン、二人のホメロスに乾杯」と題した一文を投稿している。ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞した時であったが、これは省略し、永さんの項のみを下記に要約する。

「私は永六輔さんと一緒に京都祇園祭の宵々山のお祭りに、八坂神社傍らの円山公園音楽

堂でコンサートを 30 回開催し続けてきた。永さんはその都度交遊のある有名人を連れて来て、この音楽フェスティバルを盛り上げた。初回は渥美清さんで、2 回目は黒柳徹子さん、続いて三波春夫等々でした。ある年、少年少女合唱団とステージで「上を向いて歩こう」を普通に歌った時のこと、永さんが私に「高石君、何故皆はこの歌を明るく笑いながら歌うの？ この歌の詩は 12 歳の少年が辛くて涙が止まらない思春期の悲しい詩なのに。」と語り、信州に疎開した時のご自分の体験を話してくれた。

「ともや！ 君が歌う時は涙をボロボロ流しながら歌いなさい。」と耳元での静かな命令に、ハイと返事をして、自分の心にしまいこんだ。」



永六輔さん



祇園宵々山祭の高石ともやさんと永六輔さん

(毎日新聞)

この曲が作られた時、作曲者中村八大は歌手に坂本九を指名し、坂本九は何気なく明るいポップス調で歌った。中村八大は坂本九のリズムのある歌い方を気に入ったが、永さんは全く共感せず、坂本九の軽やかな歌い方や歌詞の発音が気に入らず、中村八大と激論を交わしたと云われる。永さんは寂しさ、悲しさを切々と歌って欲しかったらしい。結局永さんが折れて妥協し、中村八大は坂本九に合わせて 3 回も編曲し直して産経ホールのリサイタルで発表され、結果として大ヒットにつながった。

坂本九さんは昭和 60 年（1985 年）8 月、日航機の御巢鷹山墜落事故でこの世を去った。丁度この時偶然に蓼科高原に居た私は、ドカンと激突する轟音を耳にした。これが“九ちゃんの最後と知ったのは翌日で、残念な早死にだった。

永さんは昭和 8 年（1933 年）、東京浅草の最尊寺住職の息子として生まれた。国民学校 6 年生になった昭和 19 年（1944 年）4 月、学童疎開で長野県北佐久郡南大井村（現小諸市）に移り住んだ。戦事中末期、東京大空襲のあった最悪の時期であった。学童疎開は学

年を縦割りにした少人数グループで編成され、主として寺が宿舎として充てられた。従って 6 年生の永さんは下級生の面倒を見ながら国民学校へ通い、親元を離れた寂しさは仲間がいたので紛らわすことが出来たと推測される。

翌年の昭和 20 年（1945 年）4 月、永さんは上田中学校へ進学した。多分その疎開者グループからは只一人合格し、入学したものと思われる。通学は宿舎から朝晩“ひとりぼっち”で小諸駅まで歩き、小諸駅から信越線で上田駅まで乗車して上田中学校へ通った。帰りが晴れて青空に雲があった日は“上を向いて歩こう”、夜遅くなって星空の時は“見上げてごらん夜の星を”と自分に言い聞かせて登下校したのでしょう。

当時の上田中学校では地域毎に報国団が結成されていて、1 年生から 5 年生までの縦組織で運営され、小諸、軽井沢地域は報国団立命会と呼ばれ、多数の会員を擁していた。

私達 48 期の同期生は平成 7 年（1995 年）文集「松尾が丘」を発刊した。そこに古沢襄君が投稿した一文に、永さんとの出会いを記しているのです、要約してご紹介する。

古沢君は東京に住んでいたが、空襲の激化に伴い、母親の実家（上田市原町、木村陶器店）へ疎開し、上田中学校へ編入学した。戦後の 4 年生まで在学し帰京した。戸山高校から早稲田大学を卒業し、共同通信社へ入社して新聞記者となった。各地総局長を務め、役員となって定年退職した。

「私が金沢総局長であった昭和 45 年（1970 年）大阪万博の年のこと、文化講演会を開催し、永さんを講師として招いた。講演会終了後、ホテルのバーで雑談中に何気なく信州の話題となった。すると永さんは戦時中に信州へ疎開したことを語った。

私も信州への疎開者であったこと、同じ上田中学校、早稲田大学で学んだことなどから意気投合して話が弾んだ。そして永さんは次のような悲しい、辛い体験を私に話してくれた。

昭和 20 年（1945 年）、上田中学校へ入学した直後のこと、4、5 年生が勤労働員で名古屋の軍需工場へ行き、留守中の出来事であった。残った報国団立命会の 2、3 年生が 1 年生を集め、“気合を入れてやる”“制裁だ”と称して何の理由もなく殴った。日頃から上級生達から日常的に暴力行為を受けていたので、その腹いせに新入生を殴ったのである。永さんは私に“信州には辛い、悲しい思い出ばかりで、楽しい良い思い出は一つもありませんでした。貴方の郷里の悪口ばかり言ってすみません。”と語った。」

永さんが有名人となってから講演会が各地より依頼されたが、小諸市、上田市、上田高校、上田高校同窓会の依頼には決して応ずることはなく拒否し、同窓会の寄付の要請にも決して応諾しなかったと聞く。

当時の報国会は全く軍隊組織で、上級生による下級生いじめは日常的に何れの会でも行われていた。2 年生が上級生に殴られたのを、下級生の我々にぶっつけ、鬱憤をはらしたのである。永さんの場合も、疎開者だったので、言動が目立っていたのでしょう。

昭和 20 年 8 月 15 日終戦の日となり、日本中が一大転機を迎えた時、学童疎開も終わ

り、学童は東京の親の許へ帰ることとなり、永さんも浅草の父母の許へ帰った。学校の学期末、2学期12月末まで在学して帰京したようだ。従って上田中学校には1学期と2学期と在籍したが、1学期は戦時中なので、正常な授業は行われていなかった。帰京して直ちに早稲田中学校に編入となり、高校となって後、早稲田大学へ進学した。在学中から三木鶏郎に見出されてNHK「日曜娯楽版」で活躍し、それからの活躍はよく知られている。

名曲「上を向いて歩こう」の作詞が、永さんの信州疎開が動機で作られたことを今回の毎日新聞夕刊の記事で初めて知った。作詞は春、夏、秋の3シーズンが表現され、冬がない。これは永さんの帰京と関連し、信州での辛い疎開生活が終わったことを意味するのであろう。

この名曲誕生に我々48期の仲間が一翼を担っていたことを知ると、何だかこそばゆい苦笑いが浮かんでくる。永さんの信州嫌いの原因を作った一端の責任は48期の仲間にもあったかと思うと、母校、同窓会に対し何か後ろめたい感情が起る。私にはこの事件の場に居合わせた小諸市の同期生がおぼろげながら判り、首謀者、加害者はほぼ推定することができる。しかし当事者の口から真相を詳しく聞いておく機会が失われたのが残念だ。何故ならその主な同期生達が既にこの世にいないからである。

永さんは著書の中で数々の名言を記している。「人間、ヒマになると悪口を云うようになります。悪口を云わない程度の忙しさは大事です。」

永さんはラジオ、テレビ、活の世界で活躍しましたが、公的な場で信州疎開の辛さ、信州の悪口を云ったことは殆どなかった。前記の古沢君、高石さんに私的に述べたことは例外で、ご自分の信条を実行した。

永さんは晩年になって上田高校の要請で1回だけ講演会を承諾し、母校を訪れたと聞き、何故かほっとしたことを思い出す。小諸市、上田市や上田中学校に責任があった訳ではなく、戦時中の教育制度が原因で悪印象を抱いたことを理解されたからだと思う。

(平成29年(2017年)9月18日記)